The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	インスタレーション作品2題「記憶の輪郭」「周防のいろ重源のあか」
Author(s)	川島, 洋一
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 180-181
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52855
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

インスタレーション作品2題
「記憶の輪郭」「周防のいろ 重源のあか」

川島洋一／福井工業大学

記憶の輪郭

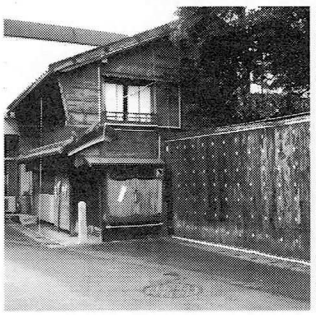
日ごろ慣れ親しんでいる風景に、人はなにを見ているだろうか。本作品は三国町の伝統的な町並みの、全長約100mにわたり黄色のカラーテープを貼付することにより、非日常的な光景をつくりだす。かつて日本中に存在していたが、今ではなつかしい記憶の彼方に追いやられてしまった日本の町並み。原色に浮かび上がる歴史の輪郭を通して、観者は記憶の中の時間と眼前の現在とを重ね合わせる。人がそこに本当に見ていたものとはなにかを、あらためて問いかける機会を提供してみた。

文化庁ほか主催　第20回 国民文化祭
ふくい2005 現代美術展

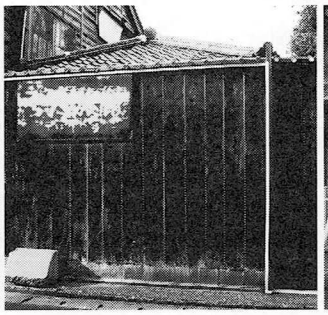
文部科学大臣奨励賞（グランプリ）受賞

制作　川島洋一＋福井工業大学川島研究室
会期　2005年10月22日～11月3日
会場　福井県三国町湊町地区

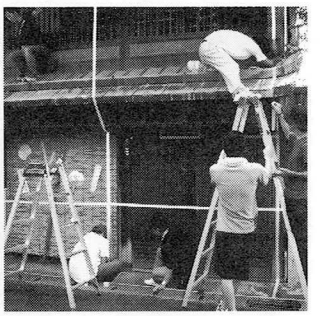
審査員　戸田正寿（アートディレクター）
天野太郎（横浜美術館／横浜トリエンナーレ）
植松由佳（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）
橿尾正次（美術作家）、　北川順一（美術作家）
西村直樹（福井県立美術館）
山本圭吾（映像作家／京都精華大学教授）



記憶の輪郭

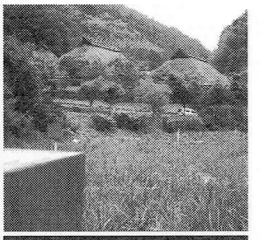


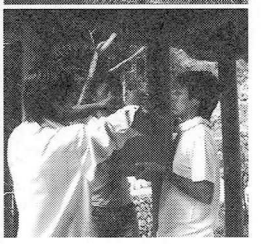
記憶の輪郭



記憶の輪郭　制作風景

建築の研究室として、こうした現代美術の制作を行うのはもちろん楽しいからであるが、本当の理由は別にある。建築の学生は他の美術分野のように実物を制作しながら学ぶことができない。図面や模型は、構想を学ぶための手段とはなりえても、それは制作過程の一部でしかない。現代美術の制作を通して、構想がスケールを伴う実物へと現実化するプロセスを最後まで体験することが、建築教育となりうると考えている。





周防のいろ　重源のあか

見慣れた自然の風景に、人はなにを見ているだろうか。本作品は色彩をテーマに里山の木々を眺めることにより、そこにある天然の色の存在を問いかける。樹木の細胞が集積して生まれる緑や赤の神秘に触れ、重源のあの強烈な赤に想いをはせてみた。

文化庁ほか主催　第21回 国民文化祭 やまぐち 2006「光と木・竹の造形展（現代美術展）」

入選

制作　川島洋一＋福井工業大学川島研究室

会期　2006年11月4日～11月26日

会場　山口市徳地地区　重源の郷

審査員 椹木野衣（美術評論家）、三分一博志（建築家）川浪千鶴（福岡県立美術館）、前田淳子（山口県立美術館）